

## ◇移住地農業の現状



長野県立北佐久農業高等学校教諭

木内 秀雄

この度の研修視察について私の報告することは、中南米の農業、特に移住地の農業を見聞したなかで強く印象に残ったことを述べるものであり大部分が聞取によるもので数字に多少誤りがあるかもしれないことを御承知いただきたい。

現在中南米への移住は、わが国と移住協定が締結されているブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、およびボリビアの4ヶ国について行れており、これを職種別は大別すれば、農業移住（自営開拓農及び雇用分益農方式）と1961年から新たに加えられた工業技術移住など。移住協定が締結されていない国へは、少数ではあるが呼寄移住の道が開かれている。

リマは人口400万、スペイン人が移民してから首府はクスコからここに移った。代表的スペイン風都市で太平洋に沿って南北にのびる砂漠の中央部で年間降水量は10～18mmという。木も草も生えない灰色の山を背にした常霧の都である。町は上流階級が住む華麗な地区と町の周辺には地方から流れ込んだ難民同様な水道も電気もない貧民窟がありその対象が凄しい。

日本にペルーとの関係で特筆する点は2つある。その1つは南米諸国で最初に日本と国交をもった国であることと、もう一つは、ペルーは南米で日本人移住者が最初に入った国である。1899年（明治32年）に第1回の移住者が入っており現在日系人は7.5万人、全人口の0.5%を占めている。

### 1. ペルー共和国

#### ワラル移住地

リマのホテルを出発、道中は砂漠の中のハイウエーをホエンテビエラの町を通過してリマから84km位北に人口2～3万のチャンカイ、ワラルという町がある。戦前からの移住地で、今ここに日系人約2097人が住んでおり主に農業に従事している。現在ここでは、チャンカイ、ワラル谷灌漑復旧計画ということで、灌漑施設を近代的なものにしようという計画である。そのための

調査が去年から始めて、現在ほぼ終り報告書が出たとのことである。

JICA リマ事務所長によれば、この計画は技術協力、協力隊、無償資金協力、移住とこの全部がうまく結びついて効果的な事業間の連携プレーが展開していけそうなものとして注目されている。

灌漑施設近代化に加えて、現在この地域で野菜栽培の技術協力を実施しようということと、できれば無償資金協力で関連施設を作りたい。それから昨年からの地域に協力隊員2名が入って協力活動を行っている。リマ総人口400万人の食べる野菜の半分はこの地域で賄っているそうである。計画によれば灌漑による受益面積は25,000 haでその内訳は、みかん、ネーブル3,600 ha、野菜5,000 ha、柿、トウモロコシ、リンゴ、各々1,500 ha、モモ、ナシ各々1,000 ha その他等で、日本の技術協力で良いものがとれ灌漑施設により1年中いつでも野菜が採れることになれば素晴らしいと思う。

私たちは、ペルーで特筆される果樹栽培の篤農家をワラル日本人学校の事務職員藤本さんの案内で、カルロス福田農園を訪問した。福田さんは、静岡県出身で戦前移住で先に実弟と従兄が、ペルーに移住したところから、ペルーは柑橘類の栽培に向いているとの連絡を受け1921年に温州みかんの苗木50本を枯れないように根を水ゴケに包み移民船に持ち込んだ。

ペルーに着くと、このチャンカイ谷に15万町歩を求め灌漑用水路を作った。苦勞の未成功してみかん王と言われたが、苦勞話などは当人は語らないという。現在病床にありお会いすることは出来なかったが、奥さんと子息のカルロス福田氏にお会いし、経営の概況を聞くことができた。

農場の規模は全部で80 ha。そのうち果樹園60 ha、ブロイラー養鶏40万羽、採卵鶏15万羽、養豚(肉豚用子とり)年間7,500頭の子豚の出荷、雌豚700頭、雄種豚50頭を飼育、飼料は主に大豆、トウモロコシ等の穀類は自給、魚粉は購入で自分の飼料工場で配合している。この外ペルー馬の改良をしその繁殖も手掛けている。奥さんの話によれば日本を発って50年、この方が長い。現在83才今も元気である。入植して一番苦勞したことは、植えたみかんの根が腐ったり農地改革で1/3に耕地を減らされてしまったことである。ここは気候がよく暮らしにはよい、入植してみかんが大きくなる間は栽培が容易で換金作物のトマト、スイカ、玉葱、メロンを作り5年間位夢中でリマの市場に出荷して生計を立てた。日本からの雲州みかんやネーブル、バレンシアなどの柑橘類を栽培したが根が腐って全部だめになり、それから根の腐らない台木を探して植えたら今度は20年経たないとならない。そこで主人はブラジルのみかんはどんなものかと苗木を持って来て栽培したら本当に美味しい。それが20年たつと実が成らなくなるみかん、それを人々は知らないで植えてあとで全部切ってしまった。そして今度は、日本からマンダリナや、その他柑橘類の苗木を集めて来た。その中でグレープ・フルーツがよい、沢山収穫できるし20年たってもよく成る。それに金柑は保存がきいて家だけが栽培しているので沢山出荷できる。木は1,000

本位である。農園は主人の弟と共同経営を行っていたが弟が死亡したので畑は半分に分けてしまった。みかんは2度とも根が腐ったりしたが、3回目は大きい木で5年、小さい木は3年になり、幼木を含め全部で50万本ある、園内は自動車で見廻りをしているが、害虫が多いので消毒は年間10~12回行なっている。肥料は80%が自給肥料で（鶏ふんや堆肥等の有機質）20%が購入肥料であるから果物の味が良く甘いので高値で取引されている。土壌は砂土で圃地の50 ha にスプリンクラーがあり5日に1回の間隔で根元に灌水しているがこの方法が最もよい。

福田さんは地元の農学校を出ると県立の柑橘試験場で実習した戦前の移住者で初めから農業技術者としてペルーへ渡った。ある意味で今日の技術協力の原型でありペルーにおけるみかん栽培の草分けで現地ではみかん王といわれている。

子息のカルロス福田さんは、ペルーで生まれ現地の大学を出て、日本の大学にも2年間留学し畜産を専攻後父のみかん園と畜産経営飼料工場は共同で経営している。

現在 JICA のチャンカイ、ワラル谷灌漑復旧計画実現のために日本へ陳情に行ったりして日本と日系人を結ぶ重要な人物であり、政治的、外交的にもよく働いている。私たちはこの訪問でもっとこのような海外日系人の人々の過去と現在に目を向ける必要があると思った。

## 2. ボリビア共和国

### オキナワ移住地（サンタ・クルース州）

大雨による河川の氾濫によりサン・ファン移住地への視察予定を変更オキナワ移住地に向かった。この移住地は昭和28年ボリビア国、リベラルタ市在住の沖縄県人が、第二次大戦で廃墟と帰した母国沖縄を救済するために沖縄県人のボリビア移住を計画、ボリビア政府に働きかけ国有地の払い下げを受け「うま植民地」を設定、昭和29年第1陣 228名、明年第2陣 127名が入植した。この植民地では、病名不明の熱病が発生流行し犠牲者が出たため昭和30年パロメティエリヤへ全員転住した。しかし付近地主の反対、立地条件不良等々があり三転して現在の第1移住地に再移転した。その後第1移住地に接する土地の払い下げを受けて第2、第3移住地とした。現在 193戸が定住している。移住地は全般的に平坦地であり勾配は南西より北に向かって1/3000~1/2000の傾斜である。

地質は各移住地とも河川の沖積による粘質土と砂質土にて構成されている。年平均気温は23.7℃、夏季の12月~2月の平均気温は25.4℃前後であるが平均最低13.9℃である。数回の降霜が過去に記録されている。平均年間降雨量は、1,283 mm、標高 245 m ~ 255 m、過去の営農の主体は米作であったが天候に左右され易く、特に1968年から早魃に強い作物を調査した結果1970年より棉作の試作を開始。1972年第2移住地に綿綿工場を建設したが棉花の国際相場の変動および1978年~1981年の間の極度の天候異変による不作から棉作戸数および面積の減少の一途をたどり、

1981年を最後に棉栽培及び繰綿工場の操業が中止された。

現在は大豆を中心とした雑作を主に牧畜をかみ合わせた営農形態であるが特に大豆については、新品種の導入により多収量が見込まれることと、搾油工場が建設されたこと等により需要が多く、ここ数年はめざましい伸びを示しており、移住地においても主幹作物になりつつある。現在牛は1万頭で肉牛（セブ牛）を飼っておりコロニヤの将来は肉牛を主体においている。尚移住地内に設置したヌエバ、エスペランサ畜産試験場においては、新規作物の導入、試作及び応用圃場試験等を行い、種子、種苗、優良牛の増殖頒布、並びに一般農業技術及び畜産飼養管理技術の普及、営農講習会を開催して栽培経営指導及び研究グループの育成等の営農普及と指導により第2次大戦後創設の日本移住地（サンフアン及びオキナワ）は30年経った。今日農業基盤も確立されつつあり、移住地外に居住している邦人、日系人も商工業に従事し自己の幸福追求とともに国づくりに励んでいる。

### 3. ブラジル連邦共和国

#### エフィゼニオ・ザ・サーレス植民地

##### （アマゾナス州）

アマゾナス州マナオス郡にある面積は、3408.6 ha、アマゾナス州の農業振興、およびマナオス市へ生鮮食品の供給を主目的として州が創設した日伯混合の移住地である。

植民地名となったエフィゼニオ・デ・サーレス氏とは、アマゾナス州における邦人受入れのもとを作った当時の州知事で、「ミナス・ゼラス州出身の親日家の名前」を入植当時の州知事プリニョ・ラーモス・コエーリオ氏によって「エフィゼニオ・デ・サーレス植民地」と命名されたとのことである。

エフィゼニオ・サーレス農協を訪問、野沢専務から移住地の概況を聞いた。この植民地は州都マナウス市から北方40 km 地点を中心に入植した。そこはアマゾンの原始林そのまま道路は未だ完成しておらず、交通機関としてのトラックは1台もない。すべて農務省のトラックが週に1回、生産物の搬出と食料品の購入の便とを計るのであるが、配車すると約束になっていても期日を間違えたり米なかったりで、入植者は陸の孤島で生活するような状態であった。入植は11月であったので時期的には山焼を終って居らねばならない。既に雨期で余程の天運がない限り11月になってからの山焼きに好都合の天気は続かない。しかも、8月、9月の乾燥期の伐採のように乾燥が充分でない。さてその山焼は予想通り半焼けに終り米の蒔付面積など予想の半分もできず、食って行くだけが精一杯の状態であったという。その後野菜を栽培して町で販売し現金収入を得たり、道路もよくなり野菜に加えてピメンタの栽培も盛んになり、年産200トンも生産され輸出するまでに成長して行った。現在この移住地の営農は主作目に柑橘、トマト、ピーマン、養鶏

の単一経営ないし、これを主体にそ菜及び柑橘を組み合わせた経営が行われている。各ロットとも一部を除き地形が悪く利用可能面積が狭く種々問題はあるが地区内を従貫するマナウス市からイタコチア市へ通ずるアスファルトの州道となっている利点を生かし、そ菜、鶏卵でかなりの収益を挙げている。

移住農家を訪問、江藤さんは、採卵養鶏の経営で6,000羽を飼っており経営も安定しているようであった。日本と違い年平均気温27.8℃、湿度も年平均して88%の高い湿度の気候では、鶏舎も風通しがよく夏の暑さも凌ぎよい構造になっている。すべて鶏舎モケージも自力で建てたものであり、施設に金を掛けないようであった。交通の便がよくなり採卵養鶏も飼料生産地に近い奥地へと移動しつつあるという。

又サンパウロ近郊の養鶏卵がマナウスに出荷されるようになれば経営にも不安がある。消費市場マナウスに近いこともあって移住地も諸々の恩恵を受けているが、マナウスはブラジル唯一の自由港として非関税地域の指定を受け、外国商品が無税で売られていることから経済は活気を呈している。市発展のために、産業の振興と工業の誘致が進められ、日本からの工場が進出して経済発展に協力している。反面移住地の若者が日本から進出して来た都市の企業に勤めるものが多く、農業後継者の問題、過疎化等悩みがあるとのことである。

#### ジャカレイ移住地（サンパウロ州）

サンパウロ州ジャカレイ郡にあり、サンパウロ市東方67 km、面積613 ha、昭和35年入植開始、現在入植者数46戸が定住している。

地形は40～130 m丘陵に挟まれた中部は盆地で、標高530～570 m 気候は年平均気温19.5℃、年により降霜があり丘陵地は果樹園、低地はそ菜用地となっている。営農状況は、コーヒー、アボガド、柑橘類、養鶏（ブロイラー用種卵）花卉（バラ、キク、カーネーション、かすみ草、鉢物）を主体とした都市近郊の集約型で、生産物は、サン・パウロ市及び最寄り都市の青果市場へ出荷している。ここで訪問した農家3戸のうち2戸は、草花専業農家でいずれも現地労働者15～20名を使って花卉生産をし、販売には中継ぎ輸送を共同で行なう。サンパウロ市に事務所をもち常に出荷規格を厳しくして市場の信用を得ると共に、市況の動きを研究し経営改善に努力して収益の増大を計っている。

私たちが訪問したうちの1人地坂さんに入植当初からの話を伺った。1956年大学の農学部を出た時就職口がなく、丁度ブラジルでも行ったら良いことがあるだろうと3月に卒業して7月の船に乗って来た。それでパーク・グランデーという所でカマテーダ（労働者）をどうにか4年間勤めて1961年に結婚してこのジャカレイ移住地に入植した。最初は金がないからこの土地をコチア産業組合が一応分譲していたのでコチアが金を貸して自分の名義にしてくれてすぐ又この土地を

抵当物件としてとっておいた。そこでこの土地 115 ha を第 2 抵当に銀行に入れて鶏舎を建てるために営農資金全部銀行から借りた。1963年シンゴラール大統領のときにインフレになったので、今迄借りていた金が3～4年経ったときには只みたいになった。当時は金利も安かったしコチアの種卵養鶏の利益も計算できた。1968年ここから3 km 位の所に25 ha の土地を買ってそこでも少し種卵鶏を飼った。今から16年位前より切花を植えた今は20 ha 近く切りバラばかりである。ここは日本人やブラジル人10家族が歩合している。今は種卵鶏が 16,000羽で大体10人位でやってもらっており、その1番の責任者として日本の2世の人に見てもらっている。もう1つはここから30 km 位の所に15 ha あり主にアボガドを植えてある。今はまだ小さいのでトウモロコシを栽培している。それとセラード、セラードと云われているから行ってみようかと思うし、バヘーラ、コチア青年バヘーラス農業協同組合というものを作って1人500 ha で50人入って 25,000 ha、戦後移住者だけで協同組合を作り日本からの色々の援助の受皿にしたい。戦後移住者だけであるということで事業団とか色々のところから比較的援助を受け易いではないかと、そういう協同組合の設立準備委員会をコチアが作ったので今年中に発足できるものと思っている。

地坂さんがこれまで一番苦労したことは、養鶏はコチアの委託種鶏が主力であったからその規模拡大ができない。1年に何羽と決まっているのでコチアが必要なだけの種鶏しかいらぬ。仕方がないからバラや落果生、トウモロコシでも植えようかということで、規模拡大していったという。昨年1年間の粗収入は10億クルゼーロ位である。

この同じ部落で始めは全部規模が同じことをやっていた。それが今でも始めた当時の規模の人やかえて減っている人もある。地坂さんのようになるには運不運もあるが、色々のものを栽培する。鶏を飼育するという。ものを生産するエネルギーの量の差ではないかという。またそれにつき込む自分の情熱であり、とことんまでやり通し途中で投げ出さない信念だという。この村において同じ位のことをやりながら自分の方針のできる人は、先へ先へと投資して行って大きくなるが、人の後へつく人は仲々それ以上の規模にはならない。結局経営能力の差だと思う。

#### フンシャル移住地(リオ・デ・ジャネイロ州)

リオ市を出発し湾上高さ70 m 長さ14 km もあるニテロイ橋を渡りニタボライ街道を通り、フンシャル移住地を視察した。この移住地はリオ・デ・ジャネイロ市北東100 km、1016 ha の土地へ現在33家族150人が入植している。入植してから24年目である。そ菜、果樹、養鶏等を中心とした都市近郊の集約農業を行う移住者を受け入れる移住地として、入植が昭和35年から始まった。地形は平坦地と数十米の山地が混在し複雑な地形で、利用できる土地は概70%内外である。台地は壤土ないし砂壤土で年間平均気温 23.6 °C (最高 28.8 °C、最低 19.8 °C、年間降雨量約 1,817 mm) である。

果樹ゴヤバ(グアバ)の産地見学のため、岩本さん宅を訪問。最初養鶏、そ菜、かん橘類の栽培を行っていたが経営が安定せず、1963年永年作物であるゴヤバを植える。1967年より出荷最初は市場の100%を占めていたが、現在は他の地方でも栽培を始めたので1/5である。その後生産過剰となりゴヤバの加工を計画したが、生食がブラジル人の嗜好にもあい生食用の需要が多くなり、現在は栽培も安定し、1971年までに借金も全部払い1981年には1人立になった。私たちがゴヤバを試食してみたが梨に似た味で、ここでは1年中いつでも収穫できるという。公民館見学。この日は日曜だったので青年達のマージャン大会があり活気があふれていた。電化工事も完成し、これからは地区内道路の整備と電話の架設工事が念願であるという。

#### 4.パラグアイ共和国

##### イグアス移住地

南米の親日国パラグアイの最重点開発地域であり、面積約 8776 ha、分譲単位は1区画 30 ha で平均標高 230 m。国際道路沿線で一般に標高が高く東西に緩かなスロープを描く丘陵地である。表土は「テラ、ロシヤ」と呼ばれる暗赤色で粘土質が 50%以上である所が多く、適度の雨量がある場合土壌は植物にとって最高によい状態である。気候は年間平均気温 22~23℃、年間雨量は 1900 mm で年間を通して大体均一であるが1日の天候の変化が激しく、1日の間に四季があると云われる程である。日本からの入植は昭和38年から始まり現在日系人244戸が入植している。

主な農業経営の形態は大豆を中心にした作物、家畜と材木である。天候の激変が大きく中心になる永年作物がない。野菜はアスションに近いのでトマトを柱にしている。

深見農場見学。主に大豆、小麦、トウモロコシを栽培を行っており大型機械による機械化、一貫農業を営んでおり、見渡す限り地平線まで小麦畑が続き雑草もなく手入のいき届いた畑には驚いた。ここでの悩みは天候不順による農作物の災害、農業機械や燃料が高いことである。今後旺盛な自助努力で全移住地農家の経営が安定することを祈念する。

中南米への移住の現状を見聞して、その主流は農業移住であり、現に大半のものが農業に従事しているが、国際化の進展する世界状況の中にあって生産性の高い、かつ収益性に富んだ有利な農業形態を確立することは容易なことではない。幸い私たちが視察した移住地では、国の施策により、JICA を中心に関係各支部を通じて適切な援助と指導がなされ、入植者の農業経営の安定化、発展のための方向付がなされていることは有意義である。

◇ 中南米の教育事情について  
(日本人移住地内教育を中心に)



宮城県立多賀城高等学校教諭

千葉 大 健

1. はじめに

限られた時間でかけ足の視察をした中でも技術協力や農業移住等に比べて最も見なかった分野が教育事情であり、しかも各地とも冬休みに入っていたり、視察時間の関係上、予定していたところが見学できなかったこともあったので、ここでは日系人移住地内教育の現状を中心に報告する。

従って、以下述べる教育事情は、前述した事情を考慮していただき、不十分な見聞がある場合はお許し願うことを予めお断りしておきたい。

2. 各国の教育事情

(1) ペルー

① 概 況

ペルーの教育課程は、小学教育（6才から6年間）、中学教育（5年間）、大学教育（2～9年間）の三段階にわかれていたが、ペルー政府は1974年学制改革を発表し、198年完全移行をめざして改革実施に努力してきたものの、その成果はおもわしくなく新制度に移行したのは半数定らずといわれている。

新教育制度では、初等教育を9年とし、これを義務制にした。そして義務教育に限らず国立はすべて無料である。

高等教育は、大学予科・大学・大学院にわかれ、大学予科は2年、大学は学部によって異なり、文学部2年、法学部7年、医学部9年（インターン期間を含む）、その他5年となっている。大学は、すべて入学試験によって選抜が行なわれ、競争率が高いという。学期は4～12月までで、



12月中旬から3月いっぱい夏休みになる。

過去、十数年の間に学校の数もほぼ2倍になり、初等教育の就学率も90%台になり、かなり成長したとはいうものの、質的な面および教室その他の教育設備も十分とはいえないようである。さらに、いったん入学した生徒も全員が卒業するわけではなく、初等教育で約70%、中等教育で50%の卒業率で、文盲率は約30%といわれている。従って、実質の就学率は初・中あわせて60~70%とみられる。教科書代が高くて、行ける人だけ行くということになるのがその原因という。この理由は南米各地で聞いたが、改めて日本の恵まれた環境を思い起さずにはいられなかった。

現在、ペルー在住日系人は約8万人（うち日本国籍所有者約7600人）で南米第二位を占め、大半はすでに2~3世になっている。また、ペルーには、1969年から全日制日本人学校がリマに開設され、中学教育までは日本と同じシステムでやっているが、それ以上は、アメリカン・スクール等に通学しているという。

国際協力事業団の日系人教育への協力は、移住者子弟技術研修、日語教師本邦研修、移住者子弟奨学金貸与（昭和59年度現在、大学月額2万円、高校1.5万円、中学1万円）などというに及ばず、青年海外協力隊派遣40数名の中、80%近くが、美術・体育などの教員であることをみてもそのウエイトの大きさがわかる。

## ② ワラル郡日系人学校

7月29日、リマより北に約80数km離れたところにあるワラル移住地を訪問し、ワラル郡日系人学校を見学した。

急な訪問と、学校が冬休みに入っていたため誰もおらず、PTAの石沢会長・藤本副会長両氏の説明ではほんの短時間、外側からみたわけである。

ワラルの全人口は約10万人でその2%にあたる2,097人がワラルに住む日系人（内訳は



ペルーワラル日本人学校の集会室（講堂にあたる）

1世6人、2世829人、3世1,150人、4世58人)である。

学校は、開校3年目で、現在、幼稚園から小学校3年までで170名が在籍し、教員は青年海外協力隊派遣教師1名とペルー人教師を含めて12名で指導している。ワラルには日系人のための学校がなく、日系人子弟の教育の重要性が叫ばれて三年前、ようやくワラルの日系人自治会員がお金を出しあって作ったので、その運営にはいろいろな苦労があるようだ。

当初、学校建設には、ペルー政府からの援助は全然ない状態であったので、資金難のため、毎年、学年進行にあわせて一教室ずつ、移住者の奉仕作業によって建増し、三年目の現在では、三教室(一室が十数坪)と、JICAの援助による幼稚園舎二室が完成している。

また、学校を囲っている外壁には、日本の野球場の外野席のように、まわり一面、企業名や商品名が大きく描いてある。聞いてみると、このグラウンドで市場を開き、人を集め、P・Rするための看板を描かせる代償として広告料をとり、学校の運営費の一部にあてているのだという。とても日本ではみられない苦肉の策というか、涙ぐましい努力の光景である。

なお、戦前の学校の建物は、太平洋戦争中に接収されたようで、現在地の道路をはさんだ向い側に古ぼけて残っていた。

ワラルの日本人学校では、日本語・英語・スペイン語を教えているが、日本人学校を終了すると、上級生は現地のよその学校に編入して学んでいる。そこでは、スペイン語の授業のため、理解しにくさと学力がつきにくい悩みを聞いた。

## (2) ボリビア

### ①概況

現在、在留日系人は約10,400人(内、日本国籍者約3,400人)を数える。

初等教育は5年制で、7才から14才までで義務制(無料)になっている。6才以上の者が入学できる期間は6カ年。農村地帯の学校は4年。

中等教育は、普通校と職業校にわかれており、期間は4年である。中学3年、高校4年。

大学教育は、学科により修業年限を異にしているが、文科系5カ年、医科・工科系は7カ年である。

初等・中等教育では、公立校の他、宗教関係、アメリカ系、ドイツ系の私立校があり、施設・教員ともにこれらの方が優れているといわれる。これは、南米全体にいえることであるが、教員の待遇が悪く、社会的地位が比較的低く、すぐれた有資格者の人材が集まらないことが大きな理由である。

ボリビアには、まだ日本人学校が設置されていない。日本人会が主催する日本語補習校がラパスおよびサンタクルーズにあり、正規の学校が休校となる夏・冬の休み期間および土・日曜日に

開校している。

## ② 沖縄移住地日系人学校

8月1日、サンファン移住地（昭和32年入植）見学の予定であったが、前夜の雷雨で道路が寸断された状態で通行不能になったので、急遽、沖縄移住地見学に切りかえた。こちらの方もきわめてひどい道路状態になったが何とか無理して日本車（トヨタ）の偉力を発揮して行った。

沖縄移住地は、昭和28年ボリビア在住の沖縄県人が第二次世界大戦で廃墟に帰した沖縄を救済するため、沖縄県人のボリビア移住を計画した。米軍民政府およびボリビア政府に働きかけにより、国有地の払い下げを受け、「うるま植民地」を創設して昭和29年8月第一陣278名が入植したのに始まる。

現在、第一移住地（所在地・サンタクルス州ウルネス郡ロスチャスコ村。面積21,800ha）、第二移住地（同トコメチ村。16,774ha）、第三移住地（同モンテクリスト村。8,333ha）の三つからなり、人口は、約220世帯1100名である。サンタクルス市から約100km離れている。

沖縄移住地には、現在、第一地域および第二地域に小中学校があり、各学校運営委員会が運営をしている。我々は、両方を訪れたが、第二の方は休みで誰もいず校舎校庭をみただけであるので、第一の方を紹介する。

名称 沖縄第一学校  
COLEGIO EVANGELICA METODISTA  
COLONIA OKINAWA NO. 1

開校 1960年12月

所在地 サンタクルス州ウルネス郡ロスチャコ村第一沖縄移住地

運営団体 公立西語校 ボリビア福音メソジスト教会  
私立日本語校・幼稚園学校運営理事会

代表者 大熊豊子 (DIRECTORA GENERAL)  
ワルテル・ドミンゲス (公立西語小学校長)  
リーデル・マルマンサ (公立西語中学校長)  
エロイ・ドウテン (公立西語高校校長)

日語代表者 大熊豊子 (幼・日語小・中学校長)

教員数 公立西語校28人、私立日語校6人

生徒数 330人 (西語)、62人 (日語)

耕地面積 64,365㎡

校舎面積 1,032㎡

## 沿革

1959年、日本キリスト教団牧師山畑勝美夫妻がボリビア福音メソジスト教会の要請で沖繩移住地に入れ、同師が女子青年への洋裁指導などを始めたのがきっかけである。

1960年12月 日語補習の夏期学校を開校、以後70年まで山畑勝美が校長を勤める。

1961年1月 夏期学校に引き続き私立日語小学校に発展する。小学1～4年、4学級、生徒数54名。

1961年9月26日 私立「コロニア沖繩メソジスタ小学校」として仮認可される。

1962年9月 ボリビア農牧省より正式認可を受ける。小学1～5年、生徒数86名。

1964年2月 組合校の解散と移住地北部のモンテベルデ校の合併により、生徒数220名になる。

同年、中学および幼稚園開設

1970年 ボリビア農牧省より公立校として運営するよう要請があり、西語公立高と日語私立高の併校の型となり、政府給の教員が派遣されると共に、公立校として地域すべての学童を受け入れることになった。他方、教育方針、教育人事は、校長も含め、メソジスト教会が掌握することになった。

1973年 高等学校新設（四年制の内、第一年次設置）

1982年 高校四年次設置

歴代校長は、現在7代目の大熊豊氏が1983年5月に着任している。

日語教育の目標は、日本語を読み、書き、話す力を身につけることによって、深くものごとを考える習慣を培うと共に、言語の背後にある日本文化に触れさせ、日本人の持つ良い資質を継承させ、ボリビア国において、個性ある有能なコロノーを育てることに力点を置いている。また、学校のメソジストの伝統を守り、神に造られた人間の尊厳を深く知り、人に対するに神に対するごとく責任と真実を尽すことを身につけさせたいと考えているようである。生活指導の面では、約束を守る、責任ある人間となるため、掃除当番・週番等の役割を通して指導している。校則に類するものは特に定めていないが、校内の共同生活を阻害する行為は、その場で注意することになっているという。

週当り日語授業時数は、次のとおりで、日本人としてのバックボーンを少しでも失わないようにと、力を入れていることがわかる。

幼稚園	8～12時	週5日
小学校	12時間	週4日
中学校	9時間	週3日

日語校教員は、大熊校長を含め、6名で指導しているが、現地経験年数が1年の者が多く、永続がむずかしいことを物語っている。

有能な人材が教育に携わらないのは、他の南米諸国同様、給料が安いことで、他の公立学校も同じ悩みをかかえていた。資格をもった教師が少なく、資格をもたない人も指導してくれる人が少なく、教師集めが大変な苦勞となっている。公立の機関に勤務している人は、インフレがひどいため生活が大変で、ストライキ等によく参加するので、一年間200日の授業日数のうち最低140日の確保もできず、不足分は、別に特別手当を支給して消化してもらったという現実である。従って高校や大学では授業日数不足のため進級が危うくなったりする等、問題は深刻になってきている。

氏名	年齢	担当	現地経験年数
大熊 豊子	45	校長、小一、中上級	7年
瀬尾 忍	46	中初級	1
木村美代子	42	小五、中中級	1
三宅美津子	32	小三	1
鈴木 幸子	23	幼稚園、小二、小四	1
山内 智子	17	幼稚園助手	4

在籍生徒数は、328名で、内訳は次のとおりである。因みに第二小中学校は、生徒数134名（日本人76名、ボリビア人58名）教員数18名（西語12名、日語6名）である。

在籍生徒数（幼、西語校）

		幼稚園	小学1	2	3	4	5	計
日本人	男	5	0	0	1	0	0	1
	女	7	1	4	2	1	3	11
	計	12	1	4	3	1	3	12
ボリビア人		7	62	36	34	25	19	176
合計		19	63	40	37	26	22	188

		中学1	2	3	計	高校1	2	3	4	計
日本人	男	4	0	3	7	3	1	2	1	7
	女	3	4	3	10	3	2	4	4	13
	計	7	4	6	17	6	3	6	5	20
ボリビア人		13	9	8	30	25	24	14	10	73
合計		20	13	14	47	31	27	20	15	93

学校運営は、学校の円滑な運営および教育活動の向上を目的に、学校運営理事会（学校代表1名、父兄代表3名、自治体代表3名、教会代表1名の計8名で構成）が設置され、決議機関として活動している。

父兄会組織として、私立日本語校、公立西語校が別々に会長、副会長、会計、書記をおいて活動している。

以上が主な概況であるが、午前中、スペイン語で授業を受け、午後、日本人のみが彼らにとって外国語である日本語を学ぶ補習形態をとっているところに、日本を忘れさせたくない親の真情がいたいほど伝わってくる。

また、日系人に雇用されたり、日系人と接触の多い現地の人は積極的に日本語を習いにくるという。

最後に、沖縄移住地の教育も、前述のような状況から推察できるように、授業時数の不足、教師の質の問題、言語の違い、教科書・教材の不備・不足等が障害となり、高校や大学など上級学校への進学率が、他国の移住地の中と比べて決してよい方ではなく、日系社会の重要な課題となっており、教師の日本への研修派遣や、日本政府への教師派遣要請などを行なっていることを申し添え、日本人の小さな援助の盛りあがりを訴えたいと思う。

### (3) ブラジル

#### ① エフゼニオ・サーレス移住地

8月2日訪問したエフゼニオ・サーレス移住地は、マナオス市から約40数km離れたアマゾナス州マナオス郡にあり、アマゾナス州の農業振興およびマナオス市への生鮮食料品の供給を主目的として、州が創設した日伯混合の移住地である。

日本人の入植は、昭和33年から始まり、現在300家族が住む。近年、非関税地域（ZONA FRANCA）の指定を受け、大発展をとげている消費市場・マナオス市を控えている関係上、きわめて恵まれた立地条件にあり、胡椒、蔬菜、養鶏等を中心とした営農で、移住地も諸々の恩恵を受けている。

現在、自治会館のそばに日本語学校があり昭和58年8月現在、教師2人、生徒45名でやっている。

日系人の教育は、子供の教育のため、皆マナオスに家を買ったり、アパートを借りたりして小学校段階から市街地のいい学校に入れて、日本同様、教育投資に力を入れているという。従って、若夫婦が出ていってしまい、農作業労働のためにだけ通って来たりして老夫婦だけが当地に残ってしまうという状況になり、今後考えなければならぬ日本国内農業と似た様子になってきているらしい。一世たちの深刻な悩みである。

それは、結局、ボリビア等と同じように、教員の給料が安く、スト続発で、政府の学校はよくないという理由によるものである。

我々が移住地を見学した時も、学校が冬休みに入っていたとはいえ、校庭でサッカー等に打ち興じていたのは日系人に使われている現地人労働者の子弟がほとんどで、人なつこく寄って来る光景に象徴されていると感じた。

サーレス小学校は、昭和34年4月移住地の合宿所内で開校し、39年新校舎落成、校名をエスコラー・オビドール・サンパイオ（第一小学校）という。37年5月に第二小学校が開校している。

現在、マナオスに日本から17社が進出してきており、ブラジルでは長男が財産のすべてを継ぐため、次・三男がそういう進出企業中心に就職する。前述のような教育投資が先行している実態があるのだという。農業後継を含めて、二・三世の生き方に変化が生じてきていることが、今後の課題を投げかけているといえる。

#### ② フンシャル移住地

8月10日訪問したフンシャル移住地は、リオ・デ・ジャネイロ市の北東約100km離れたリオ・デ・ジャネイロ州カショエイラス・デ・マカク郡にあり、面積は1,015haである。蔬菜、果樹、養鶏等を中心とした都市近郊型の集約農業を行なう移住者を受け入れる移住地として、昭和35年から入植が始まり、現在32戸約150人が居住している。大消費都市リオ・デ・ジャネイロおよびニテロイ市を控えており、立地条件は良好で、主作目は鶏卵・グアバ・レモン・マラクジャ等である。

当地には、小学校が1校あるのみで、中学校以上の上級学校は、約11km離れたカショエイラス・デ・マカク市（人口約2万人）にバスで通うか、リオに出て行くかになる。

#### (4) バラグアイ

##### ① 概況

バラグアイの教育制度は、初等教育（6年）、中等教育（6年）、高等教育（大学以上）にわかされており、これ以外に職業訓練校がある。義務教育は6年間で、中等教育は、3年間の基礎教育課程と、後半の3年間の専門別課程とにわかれ、専門課程には、工業・農業・商業および一般教育などのコースがある。

人口の片寄りがそのまま教育に反映して、学校や教員の分布にも地域的片寄りが大きくみられ、アスンシオンやその他の都市部では学校数が相対的に不足しており、1校あたりの生徒数が多くなっている。1982年現在、小学校は全国で3,613校あり、教員数20,746人といわれ、教員1人当りの生徒数は全国平均26人、アスンシオンでも26人である。

中等教育においては、中学校、高等学校はアスンシオンに集中しており、学校数では全国の23

％、生徒数では37％をアスンシオンが占めている。

小学校の就学率は、87％であるが、中等教育においては、該当年令（15～19才）の総人口の44％が中等教育を受けている。高等教育機関としては、国立アスンシオン総合大学（学生数約1万9千人）と、いくつかの分校をもつ私立カトリック大学（同合計8千5百人）がある。

文盲率は、1984年9月現在15.9％（1983年は20％強）で、努力の跡がみられる。現在、成人向けの読み書き教育も実施されている。

日系人のためには、JICAが、各移住地に学校校舎を建設してパラグアイ側に提供し、スペイン語教育を実施中である。パラグアイ側から配置される教師に対し、パラグアイの負担による給与とは別に、謝金を支給しているほか、設備教材等の充実を助成している。また通学困難な子弟のために、寄宿舎を建設し、父兄会あるいは日本人会に運営させている。

日本語修得のためには、各移住地および主要都市に在住する邦人子弟は、自治会・日本人会等が事業団の援助を受けて、日本語学校を週に1～2日（多くは土・日曜日）開校している。教師は、地元の教師経験者、青年等があたり、科目は国語を主体に、算数・社会・音楽・珠算等である。

## ② イグアス日本語学校

8月7日、イグアス移住地にあるイグアス日本語校をほんの短時間訪れる機会を得たので紹介する。

イグアス移住地は、アスンシオン市東方286km、アルト・パラナ県イグアス郡にあり、面積は87,762ha。国際道路をはさんで南北にまたがる。国際協力事業団直営では最大の移住地で、昭和36年8月から入植が始まり、1984年9月現在、日系人281戸・1,164名、パラグアイ人165戸・1010人が居住している。現在は、雑作・蔬菜・養鶏・養豚・果樹等種々の営農形態を採り入れた多角的複合経営形態の農家が多い。

1981年「イグアス日本人会館」が完成し、年間約1500万ガラニーの予算で日本人会が負担して運営されている（日本語学校運営費も含む）。

小・中学が同一地にあり、授業は半日制で7時から11時、12時45分から16時45分の2回4時間ずつ行なわれる。

移住24年目を迎え、世帯数はほとんど増減がないが、生きた日本語を教えるために、そして日本の精神を伝えるためにいろいろ苦勞しているようであった。職員室の入口には、教育勅語が掲げられてあり、驚くと同時に、日本人でありながら、日本人ではなく生きる彼らには、ここまで必要なかと思わざるを得なかった。

ここでも教師不足は悩みの種で、苦勞していた。移住者の出身者の多い高知・岩手両県では2年を一期として県費で定年退職後の先生などを送り出しているという。現在、岩手は三期、



国際協力事業団教師謝金対象日本語小・中学校

1984年-4月-1日 現在

地 区	学 校 名	教員数	生徒数
	アルト・パラナ第一日語小学校	5	70
	アルト・パラナ第二日語小学校	3	63
	アルト・パラナ第三日語小学校	3	61
	アルト・パラナ中央日語小学校	6	72
	夜 間 中 学 校	3	19
	アルト・パラナ中央 中学校	3	59
	フ ラ ム 中 学 校	1	45
	サンタ・ローサ日語小学校	5	53
	富 士 日 語 小 学 校	4	36
	ラ ・ パ ス 日 語 小 学 校	4	63
チャベス	チャベス中央日語小学校	2	14
	イグアス日語校 (小学部)	4	131
	イグアス日語校 (中学部)	3	37
	計	46	723

その他 日語校

1984-4-1 現在

学 校 名	教員数	生徒数
アスンシオン 日語小学校	3	50
アスンシオン 日語中学校	3	15
アスンシオン三育学院小学校	5	77
アスンシオン三育学院中学校	2	3
エンカルナシオン日語小学校	2	61
エンカルナシオン日語中学校	1	20
アマンバイ 日語小学校	5	92
アマンバイ 日語中学校	1	40
ラ・コルメナ 日 語 校	2	75
ストロエスネル 日語小学校	1	15
ストロエスネル 日語中学校	1	2
計	26	450

イグアス日本語学校は、小学部と中学部にわかれており、同一敷地内にある。概要は次のとおりである。

項 目	小学部	中学部
世帯数	55	35
児童数	139	41
校 舎	7室 420㎡ レンガ造り	1室60㎡ レンガ造り
週当り授業日数	6日36時間	3日9時間
使用教科書	光村図書	光村図書
主要教材教具	図書 250冊 スライド、ビデオ、ステレオ とび箱、マット、サッカーゴール	左に同じ
指導計画	あり	あり
教 師	5名	小学部と兼任
校 長	佐藤邦夫	佐藤邦夫
授業料 (単位ガラニー)	土地1haに付、 長子1700、その他1300	土地1haに付、 長子2500、その他2000

高知は二期になっている。また布教活動とは関係なく天理教本部から1名派遣されており、助かっているという。

### ③ バラグアイ職業訓練センター

8月9日訪問したバラグアイ職業訓練センターは、日本の無償資金協力により8億円（施設・建物6億5千万円、機材1億5千万円）を投じて1978年2月着工、翌年3月完成、同7月始業したバラグアイ文部省技術教育局所管の学校である。

現在、土地約16000㎡、施設・建物約6000㎡で、本館と8訓練実習棟があり、校長以下61名（うち指導員27名）の職員で指導している。

主として、無技能者であって小学校卒業以上の自動車整備科と電子科は中学校卒業以上の者）とし、各訓練分野における基礎的な技能を付与することを目標としてうる。訓練職種は、木工科、機械科、自動車整備科、電気科、電子科、冷凍空調科、配管科、建築科、印刷科の9科からなり、定員合計150名が毎年2月12日から12月6日まで43週間、1784時間の訓練を受けている。文部省の実施した追跡調査によれば、修了生の約70%（上級校への進学者を含めると約80%）が訓練受講職種に関連した分野で、中堅技術者として、労働者のリーダーとなって活躍しているという。

ここで、お会いした文部省派遣のバラグアイ人校長、志賀昭二専門家、松井啓樹協力隊員の話

でも、この工定機械類は、日本国内のどの職業訓練校にも負けない充実したものだそうで、日本からの長期・短期の充実した専門家派遣で、研修の実があがっている。この国では、ほとんどが半日勤務、半日教育が多い中において、7時15分から3時15分まで一日通しの教育機関はここだけである。

#### (5) メキシコ

##### ①概況

メキシコは実質1日のみの見学で、教育関係はメキシコ家畜衛生センターの指導ぶりしかみていないので一般的事情のみを紹介しておく。

初等教育(6年)は義務制で無償である。宗教関係の学校は、神学者養成以外の教育に携わることはできないことになっている。文盲率は、ここ数十年間の地方の教育が実ってきて1976年には、46年の52%から12%に下がってきている数字であきらかなように努力の跡がみられる。

中等教育は3年制で、普通課程の学校と種々の専門学校、農業学校、工業学校で行なわれている。中学校終了後は、2年間の普通課程高校に登録できる。

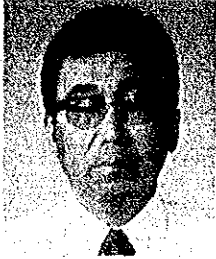
大学は60あり、国または州からの補助を受けている。メキシコ市にあるメキシコ国立自治大学(UNAM)は1515年創設の由緒あるものである。

1976年の教育	人口64,594,402
教育課程	在学者数
初等教育	12,148,221
中等教育	3,241,421
高等教育	539,372

もちろん、日本と比べれば、まだまだ就学率も低く、小学校の収容力が不足しているため、午前と午後の二部制をとっているところも多いという。

現在、在留日系人は約1万600人(内、日本国籍所有者1200人)いるが、日本人学校は1968年に設立され、1977年に日墨学院に合併されている。

## ◇ 中南米における畜産事情



佐賀県立佐賀農業高等学校教諭

堀越 博

### 1. 研修内容

#### (1) ペルー共和国

南アメリカ大陸の西部に位置した大太平洋岸に沿って南北に伸び標高 5,000~6,000mのアンデス山脈が中央部を南北に走り東部はアマゾン川上流の熱帯雨林地帯で、西部は亜熱帯の砂漠である。首都リマは中部海岸地帯に位置し、年間の雨量が10~18mm程度でほとんど年間を通して雨が降らない。ペルー海流の影響によって曇天が続き帯在中太陽をみる事がなかった。平均気温は28~16度である。

#### 1) ワラル移住地

リマから北方84kmの距離にある面積25,000haの移住地で、周囲は砂漠にかこまれ、谷になっている場所に湧水があり川となって大太平洋に流れる。リマから移住地まで約80kmの道路の両側は砂漠で、所々に点として湧水地がありその周囲のみ緑色をしたヤシや畑がみられる。移住地が近づくにつれ、耕作畑がみられ、トウモロコシ、綿、ジャガイモ、トマトなどの栽培がなされている。

この移住地の日系人は一世60名、二世 829名、三世 1,150名、四世58名計 2,097名で構成されワラルの町の2%に相当する人口である。

#### (2) カルロス福田農園

静岡県清水市出身で戦前に移住し、日本の敗戦で大変な苦勞をして現在の農園を築きあげたもので、移住して50年になる。両親は父90才、母83才の高齢ながら健在であった。

父方の4兄弟の家族の移住で養鶏部門の一部を共同経営の形態をとっている。移住当初はかん橋類の栽培だけであったが、現在はそれを主体とした果樹、養鶏、養豚、馬の飼育と経営の拡大を計る。使用人150名で農園の管理をしている。

### ●養鶏

ブロイラー40万羽と飼料工場は共同経営で、トウモロコシ、マイロ、大豆等の穀類は自家生産で補い、魚粉は購入し、工場で自家配合をしている。種卵、ふ化、育すう、解体、販売も共同で行い、更に増羽の計画を考えている。

### ●採卵鶏

鶏15万羽は福田農園で経営し、卵はリマ市の市場に出荷し飼料は共同経営の飼料工場から購入している。

### ●果樹

オレンジ、レモン、温州、ネーブル、モモ、リンゴ、ナシ、マンダリン等数多くの品種を栽培しかん橘類だけで幼木も数えると50万本にも達する。温州、オレンジ、レモンはカナダに輸出している。鶏ふんや堆肥を果樹園に還元しているために品質は大変良く高価格で取引がなされている。

### ●養豚

肉豚用子豚の生産が主で育成中の豚まで加えると種豚雌は700頭、雄50頭を飼育し、昨年1年間で859回の分娩で7,500頭の子豚を出荷した。自然交配を主に実施しているが不足の分や品種改良を目的とした場合は人工授精も実施している。カナダ、アメリカ、デンマーク等から優良品種の種豚や精液を購入し、高品質の肉生産に努力している様子がうかがわれる。

### ●ペルー馬の飼育

福田氏の趣味で始めたペルー馬の飼育もいろいろな改良がなされ、ペルー馬コンテストで2位、3位に入賞するものもあり、日本からの買手もあるそうである。

## 2) ワラル日本人学校

ワラル移住の歴史は古いが、日系人のための学校がなく3年前、日系子弟の教育の必要性が要求され、移住者が資金を出し合って学校の建設を始めた。ペルー政府からの援助が全然なく、資金難のために1年に1教室ずつ、移住者の奉仕作業によって建増しをして3年目の現在では12坪位の教室3部屋とJICAの援助による幼稚園2部屋が完成している。壁の形やペンキの色はそれぞれ異り苦心のあとがうかがわれる。教師は日本人3名、一世を含む現地人11名の計14名であるが、資格をもった日本人教師の不足や給料が安いために現地人でも指導に参加してくれないようである。学校を囲む外壁にはいろいろな商品の広告を描き列べてある。広告料をとって学校の運営資金の不足を補うための苦肉の策だそうでも日本ではみられない光景である。教師、運営資金の問題とともに教科書や教材の不足、入手難も大変なもので、ボロボロになるまで大切に使用しているのがかわいそうであった。午前と午後の2部制の課程で日本語、スペイン語両方を

使った授業で夜間は日本語会話の授業で日本語に興味をもつ現地人も多数参加している。この学校には幼稚園児、小学生1年、2年、3年生を合わせて170名程が通学している。義務教育の課程は小学校5年、中学校5年で、この日本人学校終了すると現地人の学校に4年次より編入しなければならない。スペイン語での授業のため理解しにくく学力がつかない悩みがある。

## (2) ボリビア共和国

チリとの戦争によって海岸を奪われたため内陸国となってしまった。首都ラパスは周囲標高4,000m以上の台地に囲まれすり鉢の底にあたる部分に位置し3,800mの高地で、だまって座っていても息苦しさをを感じる程である。超インフレの国家で物価の上昇率は驚くほどで、\$との交換率の変動も激しく交換した紙幣も紙クズと同じくらいで最高額紙幣の10万ペソ札でも間にあわないようである。100\$を両替したら2つ折りにして高さが30cmをこえる札束になった。

### 1) サンタクルス沖縄移住地

サンタクルスより96kmの距離にある。初めの計画ではサンファン移住地を訪問する予定であったが、乾季中に雷を伴った大雨が降るのは数十年ぶりのできごとらしく、洪水によって道路が決壊し通行止めとなり沖縄移住地に変更した。

この移住地は敗戦後の沖縄県人救済策として計画、開拓されたもので昭和28年から入殖が開始され5,400haの土地に193世帯が経営に参加している。

移住当初は主に綿の栽培であったが国際相場の下降により作付面積も減少し、現在では大豆を中心にした雑作（小麦、サトウキビ、マイロ、陸稲）と広大な土地を利用した牧畜（肉牛、豚、鶏）との複合した経営形態が定着している。

大豆は品質の面で改良の必要性があり、これからの栽培技術の向上には専門家の指導を期待している。

### 2) 沖縄移住地日本語学校

小学校5年、中学校3年の義務教育課程で、日本人76名ボリビア人58名が通学している。日系人と現地人の混合学級で文盲撲滅を大きな目標にしているが文盲率50%をこえるボリビアでは国語（スペイン語）の読み、書きの問題だけでなく文化面でも支障がある。日系人と接触が多かったり、日系人に雇用されている現地人は進んで日本語を習っている。

この学校でも同じ悩みがあり、資格をもった教師が少なく資格をもたない人でも指導してくれる人が少ない。能力がある立派な教師が指導に参加しない理由は給料が安いためで、他の公立学校も同じ悩みをかかえていた。公立の機関に勤務している人は超インフレのため生活が大変苦しく、

ストライキ等によく参加して1年間 200日の授業日数のうち最低140日の確保もできず、不足分は特別手当を支給してやっと消化したそうです。高校や大学では授業日数不足のために進級もできない学生が多くでて問題になっている。

この移住地の子供達は、授業時間の不足、教師の質、言葉の違い、教科書や教材の不備、不足等が障害となり、高校や大学などの上級学校への進学率が他国の移住地の中でも悪い方で、日系社会の大きな問題となっており、日本政府に教師派遣の要請がだされている。

### 3) ヌエバ・エスペランサ畜産試験場

洪水にあって予定外の突然の訪問で短時間しか話しができず残念である。

この試験場は、沖縄移住地内にあり 375haの広大な土地に1970年4月建られたもので、目的や業務内容は次の通りである。

#### ( 目 的 )

沖縄移住地域内における牛の品種改良及び畜産振興と雑作(大豆・小麦)等の栽培技術の改善向上による営農の安定と発展をはかることを目的としている。

#### ( 業 務 )

##### (ア) 畜産に関する試験研究

###### (a) 牧草調整法に関する試験

乾季になると牧草の生長は停止し粗飼料不足になるのでその期間の粗飼料確保のための貯蔵方法試験

###### (b) 牧草繁殖法に関する試験

乾季に繁殖、利用できる牧草の適性品種探索試験及び播種期、施肥技術等の試験

###### (c) 肉牛増体重に関する試験

在来種は強い熱射、乾燥、ダニ熱などに対する抵抗性が強く、粗食に耐える能力を持っているが増体重が5年間で250kg程度ときわめて悪く、品種改良によって、在来種の長所を残し、短期間に増体させることを目標に試験を実施している。

###### (d) 人工授精繁殖に関する試験

放牧中の自然交配が主で管理が十分でないことと栄養不足のため体力がなく発情が一定の周期性をもたず交配適期がつかめない。又、次の分娩まで2年間を要するほど体力がない。人工授精の技術向上と品種改良を兼ねた試験をしている。

##### (イ) 作物の安定生産に関する試験

###### (a) 大豆、小麦、綿の地域適応性試験

大豆、小麦、綿はボリビアの重要な作目である。

各地域にあった適性品種の選抜、播種期、施肥、栽培管理技術の向上させる試験  
(b)作物の栽培改善に関する試験

### (3) ブラジル連邦共和国

#### 1) エフィゼニオ・デ・サーレス植民地

マナウスから約50kmの距離にある移住地である。マナウスは天然ゴムの集積地として栄えた所で、アマゾン川河口から1,800km上流にあり、人造ゴムの発明及び東南アジアに天然ゴムの栽培が始まってから衰退がみられたが、莫大な量の地下資源の確保がなされてから自由貿易都市に指定され繁栄の道を歩いている。SUPRAMA工業団地には日本からの合弁進出企業も20社ちかくある。このような都市を背景に近効農業として活動している移住地で、昭和28年から入植が始まり入植者の大部分は戦前東南アジアで農業開拓を経験した人達である。

41世帯のうち27世帯が農業協同組合を組織し、主に採卵養鶏を経営し約30万羽の卵の販売、飼料の加工、配合をおこなっている。入植当初はビメンタの栽培で経営も安定していたが病気の発生により作付の減少と鶏ふんをとるための養鶏で卵価が高くなったので採卵養鶏へとかわっていった。

野菜、果樹（主にみかん、バナナ）、養鶏の複合経営で生活は安定しているが、サンパウロ周辺の養鶏が拡大し卵がマナウスに出荷されるようになれば経営も難しくなるという不安もある。ほとんどの二世は高校、大学へと進学しているが卒業後は都市での生活を希望して移住地の後継者となる者がいない。一世達の大きな問題になっている。

#### 2) アチバイア移住地

サンパウロ市から50kmの距離にあり、613haの土地に46世帯が移住し面積は広くないが都市近郊型の農業経営である。草花、養鶏、果樹などが主体で3戸の農家を訪問した。果樹（かん橘類、アボカド）、コーヒー、養鶏（ブロイラー用種卵）の複合経営農家、草花（バラ、カーネーション、キク、かすみ草、鉢もの）の専業農家、草花経営とそれを販売するための中継ぎ輸送業を合弁で経営している農家である。どの農家も常時15～20名の現地人を雇い安定した経営をしている。現地人を怠けないようにいかにして働かせるかが経営上の問題となっていた。

#### 3) セアザ（農産物中央卸売市場）

日系人の経営による南米最大規模の農産物卸売市場である。近隣諸国からの出入りも多く、穀物、野菜、草花等でないものはないと言ってよい程多種類、多量の出荷量で周囲4kmの敷地も狭く感じられる。日本人移住者が取りくむ農産物の影響が大きく、日本と異なる点は生産者が価格を提示していることと一般の人でも買付けに自由に参加できることである。



#### 4) クンシヤル移住地

リオ・デ・ジャネイロから100kmの距離にある移住地で、35世帯が入植している。入植前は炭鉱で働いていた人達が多く出身県はさまざまに裸一貫から農場を築きあげた誇りが感じられる。ピメンタ、野菜、かん橘類で始めた経営も安定せず、試行錯誤の末ゴヤバ（グアバ）が市場性もあることに気づき、10年ほど前からゴヤバを中心に栽培し更に拡大している。かん橘類は少なくなっているがレモンのように市場性があるものに植え替えている。バナナ、パパイヤ、パイナップル、ピメンタ、野菜等改良を加えながら栽培されている。

日系人は常に品種改良や栽培技術の向上に努力し現地人の追従を許さず、又市況にも大変敏感であった。日系人同士の研究会や親睦会を通して密な連携がなされている。

#### (4) パラグァイ共和国

森林の多い丘陵地帯（海拔700m）と平原（60m）が入りまじり、日本より少し広い温暖な気候の国である。内陸国で草原とかん木地帯が大部分を占める。輸送は内陸国ながら水路の利用が75%も占めるが道路の整備も着々と進んでいる。

##### 1) イグアス移住地

首都アスンシオンから290kmの距離にあり、1961年から入植が始まり87,000haの土地に244世帯が150～250haの広さの土地を所有しそのうち農地として利用は60～90haで残りはほとんどが未開墾のためこれから開墾して規模の拡大が期待される。1区画が30ha（1,000m×300m）と広大な面積で大型機械の導入により能率の高い作業がなされている。機械化大型雑作（大豆、小麦、トウモロコシ）が経営の主力で、ヤシ油、米（陸稲）、果樹が小規模経営されている。

移住者の大部分は農業に従事しているが都市部では商工業、軍人、官吏、医師等の分野で活躍している人も増えている。

パラグァイにおける日本人の地位は未だ高くないが農業においては、新しい品種の導入、野菜や果樹の改良、品質のよいものの生産など高い評価をされている。野菜の導入によりパラグァイ人の食生活を豊かにし大豆の栽培技術の指導により飛躍的に増収し国の重要な輸出品目とするなど農業やその他の職業の面でも誠実と努力によって着実に信頼を勝ち得ている。

畜産の拡大はなかなか進まず、肉牛を主体とした経営を最終目標としているが多額の資本を必要とするため移行は容易ではないようである。



イグアス移住地での小麦畑 (1区画 30ha 1,000m × 300m)

(5) メキシコ合衆国

1) メキシコ家畜衛生センター

メキシコ市から40kmの距離にあり、日本とメキシコとの家畜衛生改善の技術協力プロジェクトで次のような事業が実施されている。

(ア) 豚コレラGワクチンの試作製造技術および検定技術の確立

(イ) 豚コレラ、アフリカ豚コレラの診断技術の確立および、重要なウイルス疾病の診断技術の指導助言

(ウ) 家畜衛生センターおよび関連機関における家畜衛生技術者に対する技術指導

メキシコ国内においてもワクチン製造が民間段階で生産されているが薬効価値がまちまちで安全性に関する多くの問題を含み国家の機関で製造できるよう技術者の養成も兼ている。このセンターでの大きな問題は、ラテンアメリカ全般で言えることだが、公立の職場(学校、研究所など)の給料がきわめて低く立派な技術者が集らないことと、ある程度技術を身につけると民間企業へ移ってしまうことである。管理的立場にあるスタッフは1日(7:30~18:30)の勤務についているが一般の技術者は事務員は14:00になると一斉に勤務を終えて職場を離れ、アルバイト先の次の職場へと向かってしまい、長時間かかる実験等には特別に手当を払いひきとめなければならない。日本ではとても考えられないことである。

日本から専門家として現在4名活躍しておられた。技術協力の契約が1986年6月までになっており、とても完全にメキシコ人だけではセンターの運営に無理があらうと思われる。

もし日本国政府に理解してもらえれば、まだ数年間の技術協力を継続してほしいとの要望が強かった。

## 2. ま と め

中南米5ヶ国を視察した各地で、日系人は現地の人達から厚い信頼と高い評価をうけていることを見出し、深い感銘をうけた。これも移住者の血がにじむような努力と、正直、誠実、勤勉、忍耐、進取といった日本では失われつつある生き様が積み重ねられた結果であろうと思う。

農業に従事した人達は、特に技術面での水準が高いとの評価を受け地域に合った農業の指導者として立派に成功している。

海外諸国との相互理解、相互発展のためには、経済的援助とともに技術的援助が不可欠の要素と考えられる。人の交流をとまなう技術援助は、多くの人々とのふれあいを生じ、相手を理解する機会を多くするとともに、技術の向上によって相手国の産業の発展に寄与できる。農業の場合は自然を相手にするだけに、各国の気候、風土を熟知した現地の人々との連携が大変重要な要素といえる。

真の国際協力と言う視点からみれば、「金を出すだけ」「物を与えるだけ」であっては決して「信頼」はありえないのではなからうか。現地人の自ら実践する能力を育て、発展するために「心」の交流がなされることがなによりの方法であると思う。

日本人の生活は中南米を始めとする開発途上国と深いかわりあいをもっている。

この「信頼」こそが開発途上国の繁栄と安定とを促し、日本人の生活を維持していくうえでも重要なことと考えられる。

言語、風俗、習慣の違いに立向い、「信頼」を胸に自らの人生を充実させる生き方ができる夢のある青少年を育てるよえ努力したいと考えている。

農業者としての移住者、各国の現場で技術指導に当たっている専門家、及び青年海外協力隊の皆様様の活躍をさらに期待する次第である。

## 3. 研 修 を 終 え て

実質的には1つの国、1つの地域に1~2日間という短い時間の滞在で広大な中南米を移動し、十分な時間をかけた視察ができなかったことを残念に思います。

しかしながら「百聞は一見に如かず」の諺のとおり、各国の諸状況や移住者の実態を見聞することができ、今までの文章やフィルムだけの知識に、体験を通してさらに理解を深めることができました。

日本を離れてみて、日本が、食事、水、治安、教育、運輸、通信を始めいろいろな面で、世界

の中でどれほど住みよい国であるかを再認識するとともに、平和で豊かすぎて警戒心も薄く、食糧の大部分を輸入に頼っているが飽食にあけ暮れる今の日本であってよいのかと反省もいたしました。

今度の研修で得た知識を生徒に伝達するにとどまらず、発展途上国の人々に対して、飢えと貧困から解放された日本人がこれらの国々に対して何をしていかなければならないかを生徒達に考えさせると同時に、自らの教師としての職責にも生かして行きたいと思います。

◇ 中南米における JICA の技術協力を視察して



京都府立農芸高等学校教諭

清水淳之助

1 ペルー

(1) ペルーにおける技術協力

この国は南米大陸の北西部に位置し、南緯0度から18度の太平洋岸に面している。面積は128万㎢で、日本の約3.4倍の広さである。人口は約200万人、地勢は、砂漠で“コスタ”と呼ばれる海岸地帯、アンデス山脈より成る“シエラ”と呼ばれる山岳地帯、それに、アマゾン河の源流となっている密林地帯“セルバ”とに3分されている。気候は位置的には熱帯であるが、海岸線を流れるフンボルト海流の影響を受けて温暖で、冬期には底冷えがする。

ペルーは、中南米諸国のなかでは日本と最初に国交を開いた国で、1873年に仮通商条約を締結し、1899年には790名が“佐倉丸”で集団移住がなされた。国際協力事業団リマ事務所は、昭和52年9月に開設され、昭和54年8月20日に技術協力協定を締結している。現在、日本から派遣されている専門家は、長期だけで46名が活躍中で、次に示すプロジェクトや開発調査事業等に専念されている。

1) 技術協力プロジェクト

- a 地域精神衛生プロジェクト……………リマ市周辺地域。
- b アマゾン林業開発現地実証共同調査……………伐採林の再生事業として。
- c 酸化鉱処理技術プロジェクト……………酸化した銅鉱石の浮遊選別法による分離技術。
- d SENATI アレキパ職業訓練センター建設……………溶接・自動車・電気等。
- e 野菜生産技術訓練センター建設……………ワラル地域。

2) 無償資金協力の主なもの

- a 水産加工センター建設 (昭和53年)
- b 地域精神衛生病院建設 (昭和54年)

- c ベンタニヤ生活用水供給（昭和56年）
- d 水産物利用開発計画“マリノビーフ”（昭和58年）
- e リマ市ゴミ処理計画

### 3) 開発調査

- a 地形図の作成
- b チャンカイ、ワラル谷かんがい復旧
- c 洪水・砂防対策
- d リマ空港拡張

### 4) 技術研修員の日本派遣

通算1000名、近年は毎年100名程度派遣されている。

#### (2) 青年海外協力隊員と合流

ペルー国各地へ派遣されている青年海外協力隊員の定期健康診断受診のために、リマ市内に集まった隊員の親睦会が、リマ市内の日秘会館で催されていた。幸運にも我々視察者4名が招待され、夕食を共にしつつ懇親できる機会を与えていただいた。約40名の隊員は、すこぶる陽気で元気であった。日本のフォークソングを歌いながら、遠い異国での長い生活のために故郷を思い出してか、涙ぐむ隊員を見た時、私の目頭までがあつくなってきた。ある女性隊員は、「訓練は受けてきたものの、最初の1カ年間は言葉の不自由さのなかで、相手に指導することは大変でした。2年目には、この不自由さは解消されます。カルチャーショックというのか、この国の人々は平気で嘘をつくというのか……？約束を守らないですね……。

私が戒めても悪さすら感じていない様に思えます。食べ物も慣れればおいしいし、日常生活の不自由さは全く何も感じません。」と目を細めた笑顔が印象に残っている。

事前に資料で得た通り、3日間のリマ滞在中は霧に覆われ、太陽は見えなかった。7月28日は、幸運だったのか不運だったのか、新大統領“アラン・ガルシア・ペレス”（36才）中道左派の政権交代就任式で、街は特別祭日と化し、厳戒体制がとられ計画通りの視察ができなかった。

リマ市内にある故、天野芳太郎氏の個人コレクションを展示している天野博物館は、インカ文明以前のチャンカイカイ、チャビン文化時代の幾可学的にもすばらしい土器や織物が展示されていた。リマからパンアメリカンハイウェイを南へ32Km離れた砂漠の中にあるパチャカマ遺跡は、今から約3000年前に築かれた古代宗教、“天地創造神”を祭った神殿跡であった。

## 2 ボリビア

## (1) ボリビアにおける技術協力

この国は南米大陸のほぼ中央部に位置する内陸国で、国土はおよそ110万km<sup>2</sup>あり、日本の約3.3倍に相当する。アンデス山系に含まれる3000m以上の山岳地帯、中部の溪谷地帯、アマゾン・ラプラタ両河の上流にあたる東部平原地帯に3分される。人口は約625万人で、その70%までが山岳・高原地帯や溪谷地帯に居住している。1960年代の後半からサンタクルズ州の低地平原地帯への国内移住が進められ、この地は、今ではボリビアの穀倉地帯となってきている。1825年8月6日にスペインより独立宣言をし、時の指導者である「シモン・ボリーヴェルの姓をとり、ボリーヴェル共和国が誕生、間もなくボリヴィアと改名した。初代大統領就任以来、158年間に190回もの革命をおこし、183名もが大統領に就任してきたというお国柄である。ちなみに、最近選挙が終り、投票用紙は写真入りで、適任者には○印ではなく、×印をつけるのだそうだ。この国の経済構造は、モノカルチャー的色彩が濃く、特に錫を中心とした鉱物が最大の外貨収入源で、47%を占め、石油・天然ガスが44%と続く。

ボリビアへの日本人移住は、明治33年にペルーへ移住した人々のうちの一部の男性が、アンデスを越えてソラタ地区に再移住したことに始まる。戦後、日本（沖縄）移民の誘致運動が展開され、計画移住がなされてきた。昭和29年に開始された沖縄移住や昭和30年の西川移住がある。昭和32年6月の日ボ移住協定に基づくサンファン移住は、開始後毎年4～500人を数え、多い年には1100人が自営開拓農として入殖している。

ボリビア全域を総分担区域とする JICA サンタクルズ支部は、サンファン事業所、同試験場、オキナワ事業所、又エバ・エスペランサ畜産試験場、ラパス出張所と連携を取りながら、次のような技術協力をすすめている。

### 1) 政府ベースの技術協力

- a 日本への技術研修員派遣……昭和59年までに、のべ397名で、医療・鉱業・通信・放送・運輸関係技術者が多い。
- b 日本からの専門家の派遣……昭和59年までに、のべ205名で、政府関係機関・試験研究機関・学校等に派遣され、企画・立案・調査研究・指導・普及業務に専念されている。
- c 調査団の派遣……技術協力等にかかわる事業の適正を調査するためのもので、のべ506名が派遣されてきている。

### 2) 無償資金協力促進事業

これは、技術協力と密接な関連性を有する一般無償援助と水産関係援助とがある。前者は、病院・研究所・学校・職業訓練所等に必要な資金援助で、昭和52年から59年3月までに108億6300万円の援助がなされてきている。

### 3) 青年海外協力隊員の派遣

昭和53年4月に第1陣を受け入れられて以来、教育・看護・農業の分野を柱にして、通算32名が派遣され、現在14名の隊員が活躍中である。

## (2) サンタクрузで語り合った8名の専門家

JICA サンタクруз支部において、8名の若手専門家の方々と懇談する機会に恵まれた。(例年にない大雨により、サンファン移住地へ通ずる道路が寸断されたため)それぞれの専門家より活躍状況なり当面する課題について、短期間ではあったが、聞かせていただいたので、その要旨をまとめ報告したい。

○果樹栽培担当の氏家専門家は、果樹の繁殖と普及を目的に、6カ月前にボリビアに来られた。3000m地域で落葉果樹が栽培されているが、味の方は今一つであり、これらの改良に注がれる強い意欲が感じとれた。

○畜産関係の細川・富水・川上各専門家は、口を揃えて「ボリビアの畜産はこれからです」と話される。家畜衛生(病気)調査、人工授精、繁殖障害に特に力を入れておられた。牛の空胎期間が長く、隔年分娩をしている。これは、卵巣機能不全・伝染性疾患のためであるが、誘因は、草の問題である。完全放牧の形態では、冬期の3カ月間は餌となるべきような草がなく、牛にとってロスエネルギーが大きく、実質半年間しか発情期間がない。人口と同じ牛がおり、牛肉は1ドル/Kgと安価である。国民所得が低く、肉価格は高くはできない。生産コストをいかに下げるか、言い換えれば、いかに繁殖率を高め、効率よく牛を太らせるかが、この国の畜産の課題である。この国では、日本のように部位による肉の価格差はないのだそうだ。

○農業機械担当の近藤専門家は、「この国の農業機械といっても農具の域を脱していない」と語る。さらに「大農機具の採用は、大きな出費であり、手入れ、修善ができる状態ではない。さらに使用技術も低く、本来5%未満であるべきロスが、不注意によって10%も20%ものロスを生じる。このことは、200ドル/haの損失につながる。大農機具の導入については、援護制度もあるが、共同利用は規模的に、また国民性に問題が多い。圃場も開墾地の大木の株が除去されておらず、使いきれない。私にできそうなことは、立地条件に適合した機械化のあり方についての調査・研究をすすめることであろう」としめくられた。

○稲作専門家の二木さんより、次のような説明を聞いた。ボリビアの稲作の始まりは、18世紀にスペイン人移住者がブラジルへ持ち込んだものを、さらに日本人移住者がブラジルから30年前に持ち込んだことによる。陸稲が主体をなし、6000ha栽培されている。うち80%が焼畑で生産され、残り20%が中・大規模農家で生産している。米の種類はスレンダータイプと呼ばれる細長いものである。収量は、もみ重量で、陸稲が1.8t/ha、水稲では、5.5t/haである。水稲栽培の技術は何ら問題はなく安定している。ただ水田化をはかることは、造成費や採算を勘案すると、今のこの国の力では問題が多い。米価は消費者価格で、4Kgが1ドル程度、生産者米価は、もみで取



引され、7.5Kgが1ドル程度である。

○植物病理の専門家、大場さんは、今までのイギリスの作物保護調査団の後を継ぎ、病気の調査・病名判定のための資料・標本作成に奔走されている。ただ、この国では、知識の伝達手段が悪く困っておられた。

### (3) 山下領事にお会いして

サンタクルズ領事事務所を訪問し、山下領事よりボリビアやサンタクルズ州について話を聞かせていただいた。「サンタクルズ州は、ボリビアで唯一の緑のある場所で、日本の約1.1倍の広さがあり、この国の全食料をまかなっているところであって、みわたす限りの大平原が広がっている。イタリア系人が、金と権力を持っており、現地人は貧困で、10人生まれて来ても、7人までが死んでしまう。医薬品が少なく、買える金を持たないためである。ブラジルの債務は有名であるが、国民一人当りに換算すれば、おそらくボリビアが世界一である。教育は金持ちだけに保障されているようなもので、文盲率は極めて高い。いいことではないが、世界のコカインの70%がボリビアで生産され、国家予算の10倍に及ぶ7500億ドルの売上げがあると言われている。昔からボリビアは黄金の上に眠るゴジキだと言われており、未開発ではあるが鉱物資源に恵まれている。この国の復興には、40~50年必要であろうが、間違いなく先進国になれる国である。JICAのボリビアでの貢献は高く評価されており、農業においては特にすばらしいものがある。青年海外協力隊員を見ていると、恵まれないなかで、国際的視野と国際感覚を持ちあわせて、本当に頑張っています。今の若い者は、……。とよく聞くが、私は今の若い者は、よくヤルと思う」と言われたのが印象的であった。

### (4) ヌエバ、エスペランサ畜産試験場を見学

この試験場は、サンタクルズ州ワルネス郡のオキナワ第Ⅱ移住地内にある。1970年4月に、オキナワ移住地における牛の品種改良や畜産振興とともに、大豆・小麦の栽培技術改善による営農の安定とを目的に築かれたものである。農場面積は375haもある。作物としては、綿が多く栽培されていたが、気候異変によって冬に雨が多くなったことから、大豆と小麦作に転換されてきた。そこで、大豆・小麦の品種・系統調査や最適播種量の調査を続けているが、30年間もの長い間、無肥料栽培を続けているため、輪作体系ならびに施肥のあり方についても、より調査・研究を進めたい意向が強かった。

畜産関係では、セイブ系雑種の肉牛が、完全放牧の形態で飼育されている。サンタクルズの専門家に聞いたように、冬期の草質が悪く、200g~300g/dayの増体率である。これを400g/dayまでに向上するために、冬期間の良質な草の確保について研究がなされていた。

### (5) ボリビアとインフレ

南米各国のインフレは真刻な国家問題であることを聞いてはいたが、この国のインフレはすこ

い。3年前は公定で1ドル=24.5ペソ。今年2月45000ペソ。5月、67000ペソである。我々が7月末に訪れた時ヤミのレートで、910000ペソであった。最近は、毎日どころか、午前と午後とではレートが変わっているようで、約1日に7%のインフレだそう。笑い話に聞こえるが、現実の話は、車を買おうものならば札束を運ぶための車がもう1台必要なのだ。100ドルを換金すると札束の厚みが20cmにもなる。自国では新札を印刷する技術がなく、輸入しており、何とこれが輸入品目のベスト3である。最近、2000000ペソの新札が輸入され、便利になったと聞いたが、とにかく“0”の多い札の“0”を一瞥では判定できず、おまけに札種が多く、短期間滞在の我々には、色では覚えられず、全く困った。ボリビアに住む人は、とてもこんな困りようではないのだが……。

### 3 ブラジル

#### (1) マナオス移住地の後継者問題

ここは赤道直下の街で炎天下であり、ボリビアの冬からの急変で、私も体もおどろいた。JICAベレーン支部マナオス支所のお世話により、街から北西へ40Km離れたエフゼニオ・サーレス移住地を訪れた。ここはマナオス市に生鮮野菜を供給することに主目的を置いて、昭和33年～36年にかけて日伯合同の入殖を行なった新しい移住地である。当初はピメンタ（コショウ）栽培が主であったが、有機質肥料の供給源として鶏ふん確保に始められた養鶏が主流となってきた。今ではマナオスで消費される90%の鶏卵を、ここで生産している。ちなみにマナオスの人口は現在95万に膨れ上がっている。日本人の入殖者は頭初54戸であったが、現在は、41戸に減少している。この原因は、日本と同じようにここでも後継者問題に直面しているのである。日本人は教育熱心で、教養を高めて都会でその能力発揮しているのである。移住地の小学校も見学したが、通っているのは現地人の子供ばかりで、日本人の子弟は、街のセカンドハウスや、知人宅の下宿から街の学校に通っている。

#### (2) 東京・大阪にもまさる大都会サンパウロ

この都会はご承知のとおり、ブラジル最大の商工業都市で、人口は約850万人。南回帰線上に位置し、亜熱帯圏に属しながらも、海拔が800mと高いために、最高気温が30℃以上になることは希で、最低気温も0℃となることはない。日系人は15万人を数え、日本や先進諸国の進出企業のほとんどがこの地に事務所をかまえ、新宿以上の高層ビルが立ち並んでいる。とても世界最大の債務国の都会とは思えない。ここでは視察者4名がそれぞれの出身府県に分散し、市内見学や歓迎会に招かれた。また、私だけ JICA の特別許可を得て、500Km離れたポンペイア農工高校（私の学校と姉妹提携）を見学させていただいたので、サンパウロ郊外の移住地は見学できなかった。

### (3) リオ デ ジャネイロ

この街は、世界三大美港の一つで、カーニバルでも世界的に知られた国際的な観光都市である。ニューヨークの自由の女神と同じような、大きなキリスト象がそびえるコルコバードの丘、ボン・デ・アスカル（さとうパンの山）、夏ともなれば若いギャルの集まるコパカバーナ海岸などが有名である。リオの街からニテロイ橋（長さ14km、最高70m、片側3車線）を渡り、100km離れたクンシャル移住地を見学した。この移住地には35家族、150人の日系人が住んでおり、果樹（ゴバヤ）栽培がなされている。JICAの前身である移住振興会社が1958年に造成し、1961年から移住を開始した。九州・北海道の炭坑離職者がほとんどを占め、全く農業を知らない者ばかりと言ってよかった。養鶏と野菜作りからスタートしたが、冬に雨が少なく、かん水施設もなく、野菜は全く出来ないのに等しかった。在米種のゴバヤを作ってみたところ、よく育った。市場の100%を独占していたが、今では他所に産地が生まれ、市場の1/5をここで生産している。

## 4 パラグアイ

### (1) 世界最大の水力発電、イタイブダム

ブラジルのイグアスより、イグアスの滝を見学してから友情の橋を渡って、ストロエルネス市に入国した。この街の近くのイタイブダムは、完成すれば世界最大の水力発電所となり、70万KWの発電機が20基すえ付けられ、うち18基が常時発電されることになり、1260万KWの発電量となる。日本ならば、ダムは完成され、満水に水をたたえておりながら、2基しか発電機が稼働していないということは、考えられない。周囲が広すぎて、ダムは決して大きくは見えないが、近づけばその偉大さに驚く。

### (2) パラグアイ農業総合試験場

この試験場は、アルトパラナ県イグアス移住地に、1972年4月に、この移住地の営農の発展と振興をはかることを目的に設立されたもので、面積は116.5haである。研究業務内容は次のとおりであった。

- 1) 畜産部門では、肉牛の牧草改善と飼養管理技術の改善。
- 2) 作物部門では、大豆・トウモロコシ・小麦の栽培技術の体系化。新規導入作物の検討・試作。
- 3) 野菜部門では、トマト・メロン・栽培技術の体系化。新規導入作物の検討・試作。
- 4) 土・肥料部門では、緑肥・輪作・土壌侵食の研究。
- 5) 普及業務では、試験結果の発表会、懇談会、現場技術指導がなされている。

### (3) パラグアイ職業訓練センター

ストロエルネスの街から国際道路を280km、急行バスに乗り、アスンシオンに4時間かけて向った。JICA アスンシオン事業所のお世話になり、この職業訓練センターを視察し、専門家の

志賀さんより次の説明を受けた。

1960年代にパラグアイがアメリカより譲り受けた施設が前身となっている。短期促成技術者の養成・労働者の質的向上の必要性和建物の老朽化によって、JICA に助けを要求されたことが、この施設建築の端を発する。1978年に、古い建物を取りこわし、5000㎡の新規センターを6億5千万円で建設し、1億6千万円の機材供与が行なわれ、計8億円を無償資金協力したものである。4カ年間の技術協力として、木工・電気・電子・自動車整備・機械・建築・冷凍配管・印刷の8分野にわたり訓練されている。各分野の定員は20名で、頭初は小学校卒業以上の者を受け入れていたが、内容の理解が不十分なために中学校卒業以上に改められた。訓練期間は1カ年で、2月入学、12月卒業、1700時間のカリキュラムで実施されている。応募状況は、平均2.5倍で訓練分野により異なる。管轄が文部省になっているのが日本と異なる。

## 5 メキシコ

### 豚コレラと戦うメキシコ家畜衛生センター

このセンターは、技術協力プロジェクトとしてメキシコ合衆場における家畜衛生の改善と畜産の振興を目的として設立されたものである。メキシコシティからパチュカー街道沿いに37.5km離れたフェリッペ・ピシャヌエバのテカマク市にあり、協力期間は、1981年6月1日から5カ年計画で実施されている。日本政府より派遣された専門家が、メキシコ技術者に、動物製剤の製造と検定および診断法を指導している。

具体的に展開されているプロジェクトは次の二項目である。

①豚コレラGPワクチンの製造技術および検定技術の指導。

②豚コレラ・アフリカ豚コレラの診断技術の確立と重要なウィルス疾患の診断技術の指導と助言。清水・橋本両専門家は、「日本の家畜の病気に対するコントロール技術は世界の先端をいき、日本での豚コレラはワクチンによって絶滅した。メキシコで飼育されている家畜数は、日本に比べ格段に多く、獣医師としては、やりがいのある国です」と語られた。カンボ次長からは、メキシコの教育制度等について話しを聞いた。

メキシコシティは、海拔2000mあり、車のエンジンが完全燃焼しないために、光化学スモッグによってすこぶる空気が汚れていた。

## 6 無事海外視察を終えて

初めての海外体験が、日本から最も遠い中・南米を視察するという機会に恵まれ、事前学習もしたものの「百聞は一見にしかず」とは良くいったものである。見ず知らずの中・南米の街を歩くとき、私が日本で異国人を見るごとく現地の人に、注目され異様に感じた。今から思えば、今

までにこんな体験がなかったからであって、決して悪気からではない。私がスペイン語もしくはポルトガル語で話しかけることができたなら、おそらく彼らは人なつこく近寄ってきたにちがいない。日曜日でもなければ祭月でもないのに、小・中学校程度の男の子がよく目に止まる。これは、日本では考えられないインフレと生活の貧困のために、働ける年代になれば、働くこと（靴みがき・物売り・強制的な駐車番など）で親の生活を助けているのである。日本の社会にも貧富の差はあるが、南米のそれとは異質の様な気がする。日本は“総国民中流意識である”といわれている。中南米では、極一部の大金持ちと一部の中流生活者、残りのほとんどが貧しい生活をせねばならないのである。今の日本の子供達は、何と恵まれた生活をしているのか。しかもこの恵まれた環境をあたり前に思い、大切な何かを忘れているのか、知らされていないのか……。

ブラジルのある移住地を訪ねた時、年輩の一世にあたる人は、「今度電話がつけば、一番に日本に電話したいですね。」と何よりも嬉しそうに話してくれたこと。ある JICA 事務所で現地採用職員として働いている Aさんは、「私は二世として、この地に生まれました。是非父母の国、日本に行きたいと念願しているのですが、先立つ物がとてもとても……。」と話されたこと。移住地で150haもの農地を持ち、大成功されている Kさんは、「南米はこれからの国ですよ。教育の充実と民主行政が必要です。」と語られたこと。これらのことが今も心の奥深く残っている。

中南米の訪問したどの国においても、JICA の技術協力の貢献と、日本人移住者のなみなみならぬ努力の結果で成し遂げられてきたすばらしい農業技術については、高く評価されている。この結果、対日感情は良好で、自国の開発面において、日本の協力にける期待は大きいものを感じた。

“日本では水と安全はタダである”ということを知っていたが、今回の視察で実感し、また、ペルーの砂漠の中を車で数時間走りつつ、さらに、アメリカ上空からグランドキャニオンの谷のすばらしさを眺めつつ、日本はどこへ行っても緑豊かで、いかにすばらしい国であるかを認識するのでした。

日本人の海外旅行ブームは、特に盆・正月にテレビ等で放映されたり、新聞のコマーシャル欄等で知らされる。旅行者の行先は、先進諸国や国際的観光地であって、決して開発途上国ではない。我々も、特にこれからの時代を背負って立つ青少年も、開発途上国の人々が、いかに一生懸命生きているのか、日本人では考えられない苦勞をしているのか、を是非知ってもらいたい。また、理解させる機会を与えねばならない。日本一国だけが、世界の先進国だけが、いつまでもこのままの状態を存続できるものではない。地球社会に生きる仲間の平等性と均等性が重要であり、国際理解教育は国民的課題として、充実・発展させ、国民総力での国際協力ができる先進国日本の日本人になりたいものだ。

## ◇ 中南米のまとめ

団長

木内秀雄

第21次高校教師海外研修視察団として、国際協力事業団のご厚意により中南米5カ国の産業、文化、社会、教育事情や国際協力事業団が実施している国際協力の現場、移住日系人の活動の現況を20日間という短期間に時間のロスも少なく計画通り効率的に、検ある研修が出来たことを感謝している。

次年度の参考のために印象に残ったことと提言を列記する。

1. 中南米の移住地、試験場では日本とは遥かに気候も違う（雨期と乾期）場所で苦勞されている農業を見学させてもらって、非常に参考になった。またボリビアのサンタクルズでは、日本から派遣されている8名の農業専門家の方々と、雨で大水のため道路が不通となり移住地に行けなかったということで半日間、稲作、果樹、畜産（家畜衛生・人工授精・繁殖障害）農業機械、植物病理等について現地での研究概要や苦勞話、ボリビア農業の課題は印象に残った。

2. 日本と違って昼間、祭日でも日曜日でもないのに現地の子供が町をうろついている。日本ではとても考えられない情景を見て、現地の人に聞いてみると、ひどいインフレで、学校へ行くどころではなく、出来る仕事を捜して親の手助けをしないと食べて行くことが、難しいことを聞いて日本の子供は本当に幸だと思ふ。日本での「いじめ」が現地でも話題になっているが、移住地ではそういうことが考えられないという。今、日本のテレビ、ドラマ「おしん」のビデオが移住地の公民館で視聴され好評であるという。子供は小さい時から苦勞させなければいけないというこらしい。

3. 移住地で大きな問題になっているのが子女の教育問題である。日本人学校もあるが教師の質の問題、それから人員なども、もう少し確保できて、ドイツ人学校のようなレベルにまでもって行きたいというのが現地での願いである。更に日本人が上級学校に行けるような学力をつけるようにしてもらいたい。このことが今後の移住者の生活のレベルアップと技術移転などがうまく出来るのではないかという気がする。

4. ペルーでのワラル移住地では耕地の周囲は木や草も生えない灰色の砂漠が広がっている。灌漑用水などの設備がもう少し整えばという話を聞いたが、今国際協力事業団が計画しているチャンカイ・ワラル谷灌漑復旧計画が実現すれば、今砂漠化している所でも農地として十分使えるようになるのではないかと感じた。

5. ブラジルは余りにも広過ぎて、どこどこを見たかという感じだった。飛行機からアマゾンの密林を見ると幾つかの筋があって、それは道路と思われるが、この奥地まで開発が進んでいるのには驚いた。テレビや雑誌で開発のマイナスの面も報道されているように、移住地での開発も植林という面を含めて自然との調和ができぬものかと感じを持って帰国した。

6. メキシコでは家畜衛生センターでプロジェクト方式による研究協力の現況を視察したが、現地での話しによれば、借金国ということで職員の給料も安いことなどがあって、日本では考えられないような勤務になっており、協力期限の来年、日本の技術者4名が引上げた後出来るのかなあという気がする。

7. 海外に行って見て、あたりまえのことであるが世界の通貨はドルを基準にして価値が決められており、ドルが世界でただ1つの国際通貨であることを実感した。

8. 飛行機による研修は、昔の船旅であれば、目的地へ達するまでには50日を要する長い航路も、20日間に、しかも中南米5カ国の視察研修ができたことは隔世の感であり、移住者の渡航も船から航空機に切り替えられた今では、南米は遠くない、と感じた。

また、日本では免角言われる若者の動向の中であって、途上国の人々と共に国造りのために協力し献身的に頑張っている日本の若者が世界に向けて日本を知らしめているのだということを目と肌で感じて来たということは、何物にも代えがたい貴重な体験であった。





JICA